

## 慶大・法「論述力」

## 【解答例1】

政治的空間としての「公共空間」では、人間は自己の言動への責任を負わなければならない。しかし、現代の人間は社会という保護空間において、自己が責任を負う「公共空間」への所属を誰もが避けたがると筆者は指摘する。これに対して、古代人は、アレントが指摘するように「公共空間」における責任を自ら進んで引き受けていた。両者を隔てている差異として筆者が着目するのが「自由」である。誰もがやりたがらないことだからこそ、古代人は自分の責任でやろうとした。他者にはできず自分だけができるという点で、そのような振る舞いこそが「個性」であり、「自由」であつたと筆者は考える。自分の生活の保護を主張するだけで、「公共空間」に現れずに済みますことは愚かだと筆者はいう。その根底にあるのは、「公共空間」で責任を担う自由こそが必要だという問題意識である。

以上の問題意識を下地に、筆者は「セキュリティ社会」について論じる。それは、他者への不安を技術的に解決しようとする社会である。しかし、不安は各人の「覚悟」の欠落に原因があり、その解決こそが必要だと筆者は考えている。

私は筆者の見解に賛同する。それは、私たちが「セキュリティ社会」をただ単に求めることに危うさが潜むからだ。不安解消のための技術の開発・運用には巨額な経費が必要になる。これを担えるのは国家や企業のような巨大な組織しかない。その結果、セキュリティ対策を通じて巨大組織に機能が集中し、その権力が強大化する。巨大組織は各人の生殺与奪権をもつがゆえに、そのあり方に対して人びとが意見を述べる自由は封殺される。まさにセキュリティ全体主義を招くのである。

この危うさを回避するには、私たちが「覚悟」をもつしかない。それは単なる精神論ではなく、実践論でなければならぬ。筆者のいう「覚悟」とは、「公共空間」で責任を担う自由を行使することである。セキュリティに関していうならば、日々の生活における不安をなくしていくために、各人が「自分だけができる活動」をすることである。たとえば、子どもの登下校時の見守り活動をする住民グループがある。この人たちは誰かに命じられたわけではなく、自発的に行っている点で本当の自由を行使している。セキュリティを誰かにお任せにするのではなく、自らの責任と自由の問題として取り組む。そんな小さな営みから「公共空間」は形成されるべきだ。

## 【解答例2】

アレントの考察によれば、古代人は司法や防衛や政治的領域の課題、「公共空間」に登場し活動することが自らの責任であり、かつ本物の自由を享受することだと考えた。他人に見られ聞かれる公共空間で発言し行動することが責任と自由を示すのだ。しかし、現代では公共機関が提供する公共サービスが市民に代わって政治的活動を代行している。その結果、現代人は「政治的空間としての公共空間」から退き、社会によつて保護され政治的活動を免除されている。だが保護された空間に退き留まり続けられれば、人は他者を気遣い責任をとらなくなる。そして人は互いに疑い深い視線で見、怯えながら不信と不安の中で生きざるをえない。この不安は公共空間での責任を担う「覚悟」をもたないことに由来する。セキュリティ社会とは、他者への不信や不安を監視技術によつて解決しようとする社会だと著者は主張する。

だから、セキュリティ社会への対応としては不安を技術によつて軽減することではなく公共空間に主体的に参加する覚悟をもつことだとする著者の見解に私は賛成する。現代の日本社会では、場所を問わず至る所に危険が存在しているとすると、安全神話の崩

壊や体感治安の悪化が行政やマスコミ権力から流布されている。それに対応するとして、24時間の監視カメラ体制やゲイテッド・コミュニティが権力や業界から提案されている。つまり、セキュリティ社会とは、人の他者への気遣いを重視する方向ではなく、行政権力の肥大化や民間業界の利益の拡大をもたらし、公共空間からの人々の退行を強化するものとして、社会による過保護なのだ。

しかし、そうした対応の結果、市民は他者を気遣うことを一層しなくなり、結果他者に対する不安と分断、行政への依存が拡大し、他者への責任観と自らの主体的自由は縮小する。客観的には凶悪犯罪は増加していないのに体感治安が悪化し、セキュリティ社会の拡大を招いたのは、私達市民が行政やマスコミ権力の世論操作に屈服し、公共空間への積極的な参加の責任と覚悟を弱体化させたからだ。だから必要なことは、監視カメラ技術に頼ることではなく、地域での人間関係、他者への気遣いを強化する文化や行事、生活支援のボランティア活動をNPOなどが主体的に形成し、公共空間に自ら現れ、活動し発言することである。そうした主体的活動に自分達の本物の自由と喜びを見出すことだ。

### 【解答例3】

公共空間とは、自分が発言した場合にはすぐにその責任をとらされる空間だが、古代人はそうした空間に自ら姿を現して発言していた。彼らは他者がやりたがらないこと、他者にはできないことを自分の責任においてやることで、自分の個性を示そうとした。彼らは他者がやりたがらないことを自分ではできる、「やりたくない」という意識の拘束を自分は受けない、というところに自由を見出していたのだ。一方現代ではこうした公共空間に属することを誰もが避けたがる。人は社会に保護され、政治的な活動を免除されることを望む。彼らは政治に対して遠い外野から野次を飛ばすように発言するだけだ。しかし現代人は発言への責任を免除されているが故に、個性を示すことも真実の自分を示すこともできない。その点で現代人は自由ではないと、筆者は考えている。

われわれの日常生活を覆っているこの保護空間では無責任な発言が許され、他者を気遣うことも免除される。その結果人は他者を信用しなくなり、他者の視線に怯えながら生きるようになる。今日のセキュリティ社会とはそうした他者への不信・不安を監視技術によって解決しようとする社会だ。しかしその不

安とは覚悟を持たずに世界に属している結果なのだから、必要なのは覚悟を持つことだと筆者は言う。

だが私は筆者のこの見解には反対だ。人間とは本質的に、他者から認められること、他者によって受け入れてもらうことを求める存在だ。ところが現代社会は人を、成績や業績によってしか評価しない。そこでは人が何かを言っても、成績が良くなければ無視されてしまう。ポリスでは評価されたような「ユニークな偉業」など何の意味も持たず、「真実の自分」を示すことも求められない。こうした中で「他人と取り換えることのできない」かけがえのない自分が受け入れてもらえないと感じた時、人はその孤立感を社会や人一般に対する怒りに転化し、無差別殺人のような犯罪として表現する場合がある。セキュリティ社会とは、そうした事態に対処するものとして登場したのだ。である以上、必要なのは覚悟ではなく、成績という単一の価値観で人を評価する社会を、個性を示せる社会へと変えることだ。誰もがありのままの存在として受け入れられる時、人は安心して他者の前（公共空間）に自分をさらすようになる。そこでこそ監視技術も必要でなくなるのだ。